



令和2年9月20日 奥都城秋季大祭・役員のみで神事行う



発行所

大牟田・荒尾地区与論会

発行人・朝岡光男

TEL 0944-56-7510

第129号

注意事項

『検温』『消毒』を実施。必ず『マスク着用』。
奥都城内は三密にならない様お願いします。

「与論会だより」は今回より総天然色にて発行します

一、ところ 与洲奥都城前広場

一、とき 1月3日(日) 午前10時～12時

新年あけましておめでとうございます。
昨年は、新型コロナウイルスに振り回され、7月の大雨による
水害被害での1年でした。
コロナ禍は、まだ収まりそうにありませんが例年通り、初詣を
左記の通り行いますので、よろしくお願いいたします。



おおはらえのことば
大被詞

高天原に神留り坐す 皇親 神漏岐神漏美の命以ちて八百萬神等を神集えに集え賜ひ神議りに議り賜ひて我が
皇御孫命は豊葦原水穗國を安國と平けく知ろし食せと事依さし奉りき此く依さし奉りし國中に荒振る神等を
ば神問はしに問わし賜ひ神掃ひに掃ひ賜ひて語問ひし磐根樹根立草の片葉をも語止めて天の磐座放ち天の八重
雲を伊頭の千別きに千別きて天降し依さし奉りき此く依さし奉りし四方の國中と大倭日高見國を安國と定め
奉りて下つ磐根に宮柱太敷き立て高天原に千木高知りて皇御孫命の瑞の御殿仕へ奉りて天の御蔭日の御蔭と
隠り坐して安國と平けく知ろし食さむ國中に成り出でむ天の益人等が過ち犯しけむ種種の罪事は天つ罪國つ
罪許許太久の罪出でむ此く出でば天つ宮事以ちて天つ金木を本打ち切り末打ち断ちて千座の置座に置き足らは
して天つ菅麻を本刈り断ち末刈り切りて八針に取り辟きて天つ祝詞の太祝詞事を宣れ此く宣らば天つ神は天の
磐門を押し披きて天の八重雲を伊頭の千別きに千別きて聞こし食さむ國つ神は高山の末短山の末に上り坐して
高山の伊褒理短山の伊褒理を搔き別けて聞こし食さむ此く聞こし食してば罪と言う罪は在らじと科戸の風の天
の八重雲を吹き放つ事の如く朝の御霧夕の御霧を朝風夕風の吹き拂う事の如く大津邊に居る大船を舳解き放
ち艦解き放ちて大海原に押し放つ事の如く彼方の繁木が本を焼鎌の敏鎌以ちて打ち掃ふ事の如く遺る罪は在ら
じと被え給ひ清め給ふ事を高山の末短山の末より佐久那太理に落ち多岐つ速川の瀬に坐す瀬織津比賣と言ふ神
大海原に持ち出でなむ此く持ち出で往なば荒潮の潮の八百道の八潮道の潮の八百會に坐す速開都比賣と言ふ神
持ち加加吞みてむ此く加加吞みてば氣吹戸に坐す氣吹戸主と言ふ神根國底國に氣吹き放ちてむ此く氣吹き放
ちてば根國底國に坐す速佐須良比賣と言ふ神持ち佐須良ひ失ひてむ此く佐須良ひ失ひてば罪と言う罪は在
らじと被へ給ひ清め給ふ事を天つ神國つ神八百萬神等共に聞こし食せと白す

新年あけましておめでとうございいます

会員の皆様におかれましては、つつがなく新しい年をお迎えのことと心よりお喜び申し上げます。

昨年は、新型コロナウイルスによる感染症は世界中で感染の拡大が続いていまだに終息の兆しが見えませんが、いちじるしい環境の変化に各地域社会が疲弊し、各自「感染しない。感染させない。」という気持ちで、感染拡大防止対策にそれぞれの日常生活において、ご自身の生活に合った「新しい生活様式」を実践した一年ではなかったでしょうか。

また、令和2年7月6日からの記録的な豪雨により、大牟田市において大規模な被害が発生しました。会員の方にも災害に合われた方もあり、いまだに復旧が進まず仮住まいされておられる方々達もいます。

今回、「大牟田水害被害・与論島新型コロナウイルス感染対策」の義援金を呼びかけたところ、会員皆様、与論を愛する方々、与論町、全国の与論会の皆様方からたくさんの方の支援をいただき、誠にありがとうございました。改めてユンヌの絆の強さ。深さに感謝と感激で胸いっぱい、**「誠の心」**に生きた先祖の血が脈々と受け継がれた思いを感じました。

大牟田・荒尾地区与論会の次世代への歴史の継承の一環として、今年度より「三池移住50年の歩み」を連載してまいります。与論島の先祖を持つ私たちに先人達の「誠の心」の継承につながればと思っております。今後、先人達の誇りをもって地域社会の発展に貢献寄与できる大牟田・荒尾地区与論会として役員一同一丸となりお世話させていただきます。

会員の皆様のご健勝とご多幸を心よりお祈りすると共に、本年も皆様の与論会活動に対するご支援、ご協力のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。

令和3年 元旦



大牟田・荒尾地区与論会

会長 朝岡光男

与論会の動き

自 令和2年9月
至 令和2年12月

9月13日 奥都城清掃 17・18・19地区担当

20日 奥都城秋季大祭 役員のみで神事行う

10月11日 奥都城清掃 1・2地区担当

(被災地当番の為役員のみ)

11月8日 奥都城清掃 12・20地区担当



9月13日



10月11日

祭主変更届け

祭主変更されたところは祭主変更届をお願いします。

変更届は、祭主変更届をご記入の上祭典受付まで提出をお願いします。

「コピーして記入するか、受付で用紙を用意しておりますのでご利用ください」奥都城正面掲示板のネームプレートを令和3年4月4日(日)春季大祭までには改正を行いますので、今まで届を出していただいた方も改めて出してくださいようお願いします。

祭主変更届け

現祭主	新祭主	申請者氏名	申請者住所	申請者電話

※祭主とは連絡が届く方で、奥都城壇の管理責任者です

会費未納の方は、初詣の時も受け付けておりますのでお忘れないうちにお願います。

令和2年 秋季大祭



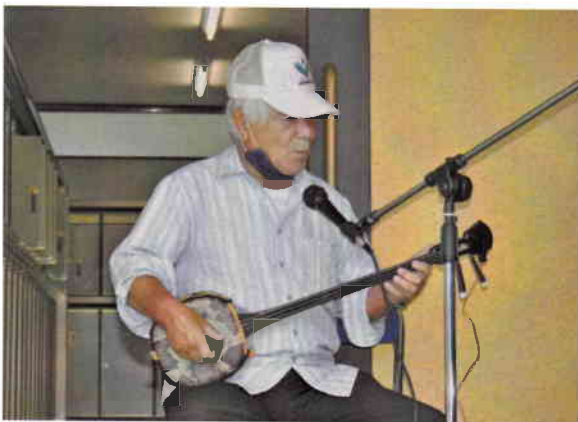
田尻神主と役員のみで神事



役員一同郷土謡拝



令和2年 秋季大祭



義援金ご協力いただいたお名前(敬称省略)

令和2年7月6日に発生した筑後方面の大雨と7月22日に与論島にて新型コロナウイルス感染者発生による義援金をお願いしたところ、皆様からたくさんの方の支援をいただきました。

とくに、堀恵子さんから「故・堀円治」さんの遺志として100万円寄贈戴きましたので改めてお礼申し上げます。

大牟田・荒尾地区与論会でご協力いただいた「与論町新型コロナウイルス感染症対策支援金」96万4500円は東京与論会宛に9月1日送金。

全国より集まった「308万9500円」(大牟田含)を与論

町へ9月25日に送っております。

大牟田・荒尾地区与論会の被災者義援金配分は関西与論会より入金次第おこないます。床上浸水限定で配分しますが、現在掌握している皆様はご案内チラシでお知らせしている12名です、それ以外の方で被災にあわれた方をご存知でしたら、会長迄連絡をお願いいたします。

「大牟田水害被害・与論島新型コロナウイルス対策」等両方義援金をお願いしたところ、こんなに多くの皆様から多大な浄財を届けていただき、感謝と感激でいっぱいです。紙面をお借りしてお礼に代えさせていただきます。ありがとうございました。

No.	お名前	金 額	No.	お名前	金 額
1	堀 恵子	1,000,000	53	本 恵輔	10,000
2	田畑 恵久	80,000	54	本 祐輔	10,000
3	酒匂 俊介	30,000	55	森 整昭	10,000
4	朝岡 光男	30,000	56	森 光廣	10,000
5	田尻 珍哉	30,000	57	吉田 高行	10,000
6	林 竹美	24,000	58	渡 ヒツエ	10,000
7	叶 俊寛	21,000	59	田中オトメ	8,000
8	小崎 秀明	20,000	60	南 榮子	8,000
9	川上 洋	20,000	61	南 清子	8,000
10	川口 幸雄	20,000	62	松井 初子	7,000
11	坂本芙美子	20,000	63	嵐山 清次	6,000
12	竹内 征夫	20,000	64	池田 武彦	6,000
13	田中 光枝	20,000	65	浦田美知子	6,000
14	坪井トヨ子	20,000	66	鬼塚 良子	6,000
15	永井 勝次	20,000	67	杉本 民子	6,000
16	仲野 装業	20,000	68	竹 昌宣	6,000
17	西脇 和江	20,000	69	竹内 澄子	6,000
18	堀 榮吉	20,000	70	堤 光世	6,000
19	本 紀代司	20,000	71	濱田 浩昭	6,000
20	山 広志	20,000	72	松井 清一	6,000
21	猿渡恵一郎	15,000	73	松井 康徳	6,000
22	砂川真佐江	15,000	74	目原・河村	6,000
23	堀 幸子	15,000	75	柳田 勝範	6,000
24	町 ケイ子	13,000	76	山下 富彦	6,000
25	池畑 重富	10,000	77	山田 治作	6,000
26	入来 貴範	10,000	78	池田 新市	5,000
27	入来スエ子	10,000	79	黒田 豊	5,000
28	兼屋ミサエ	10,000	80	町 佐代子	5,000
29	川口 康則	10,000	81	松井 武男	5,000
30	川畑 幸雄	10,000	82	森 亮子	5,000
31	熊谷 博子	10,000	83	山下 義明	5,000
32	黒田 修一	10,000	84	山田 久司	5,000
33	黒田ノブ子	10,000	85	池畑アヤ子	4,000
34	小宮 鉄雄	10,000	86	小笠原紀代美	4,000
35	高橋 東蔵	10,000	87	牧園 清美	4,000
36	竹内 隆雄	10,000	88	町 英治	4,000
37	竹林勇次郎	10,000	89	堀 泰博	3,000
38	竹本 登	10,000	90	佐藤 幸江	2,000
39	田中 國重	10,000	91	永井 菊枝	2,000
40	田畑 正喜	10,000	92	橋本 節子	2,000
41	出村 進	10,000	93	原田 隆一	2,000
42	出村 信雄	10,000	94	山元 信幸	2,000
43	長野 勝	10,000	95	山元 美雪	2,000
44	西脇 健一	10,000	96	募 金 箱	1,000
45	野田 輝文	10,000	97	与論町役場	200,000
46	林 清正	10,000	98	東京与論会	565,000
47	福 弘光	10,000	99	名瀬与論会	183,000
48	益山 憲一	10,000	100	中部与論会	75,000
49	益山 哲夫	10,000	101	鹿児島与論会	30,000
50	町 登志和	10,000	102	沖縄与論会	30,000
51	南 園江	10,000	103	鹿児島与論会	20,000
52	南 弘幸	10,000		合 計	3,164,000

市政功労者44人の功績たたえる

2020年度大牟田市市政功労者表彰式が11月6日、市役所議場で開かれた。地方自治、社会福祉、教育文化スポーツに貢献した人や善行を行った人たちが、合わせて44人を表彰。関好孝市長から表彰状や記念品が贈られ、長年の取り組みに光が当てられ、功績や活躍をたたえた。

本年度は固定資産評価審査委員会委員、消防団員、保護司、調停委員、学校歯科医、民生委員・児童委員、スポーツの全国大会で優秀な成績を残した学生などを表彰。新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、密を避けるために午前と午後の部に分かれて行われた。

午前の部の式典で関市長は「地域社会の発展と福祉増進のために献身的な活動を続けられた方々の功労に深く感謝します。豊富な識見と貴重な経験を、次の100年を見据えた大牟田の発展のために生かしていただきたい」と式辞。一人一人に表彰状が手渡された。

被表彰者を代表して田中博仁さんは「長年活動を支えてくれた多くの皆さまの支援のおかげ。今後も市政振興発展の一助となるよう、なお一層努力する」と謝辞を述べた。

被表彰者は次のとおり。敬称略。

【市政功労者】

〈地方自治〉平橋幸生（固定資産評価審査委員会委員） 柿原和彦（消防団員および分団長）

〈社会福祉〉梶原修平（保護司） 古賀幸子（同） 宮川勝美（同）

川崎耕二（調停委員） 太田勝利（民生委員・児童委員） 太田三枝



2019年8月11日 高校インターハイ
個人100kg級優勝。会場鹿兒島アリーナ

子（同）大津久仁夫（同）大橋麗子（同）奥苑和司（同）奥園紀昭（同）川上勝行（同）川上久雄（同）木村ティ子（同）久後勝幸（同）高口悦子（同）古賀なほみ（同）古賀壽子（同）塩塚康尋（同）竹藤節子（同）月野眞紀子（同）鳥飼久子（同）仲野美子（同）西山明（同）野田美智子（同）原口澄代（同）東隆也（同）福光晴一（同）三池眞弓（同）村上かゆき（同）安元洋子（同）山下幸子（同）山下多鶴子（同）

〈教育文化スポーツ〉山下浩昭（学校歯科医）古賀達也（スポーツ推進委員）塚本幸子（同）栗原重行（町内公民館長）田中博仁（同）寺地耕造（同）森健心（全国高校総合体育大会柔道男子個人100kg級優勝）山口葵良梨（同女子個人63kg級優勝）石原愛依（国体水泳少年女子A2000m平泳ぎ優勝）

【善行】藤木賢一（三池山の登山道・遊歩道の保全整備）

11月7日 有明新報

田畑前実たばたまえみね(平成10年12月9日逝去・享年88歳)さんがお亡くなり、遺品を整理してありましたら与論会にかかわりのある写真がたくさんありましたので、田畑重美(加納町在住)さんより寄贈いただきました。

年代や場所、お名前などは分かりませんが掲載しますので写真に載った当人を知るかたいましたら懐かしんでください。

田畑前実さんが三味線愛好会の会長として、昭和55年7月30日から8月11日に与論島を訪問。

前大牟田市長古賀治さん、瓜生孝助役、松井才圓市会議員ら総勢約90名。

当時の写真を次回掲載します。



第1回 ミス大牟田・初代グランプリに輝いた 田畑百合江さん(中央)
百合江さんは田畑前実さんの長女です

田畑前実さん写真より



朝潮関



与論三味線愛好会メンバー

田畑前実さん写真より



口之津移住百年祭記念誌

「与論島から口之津へそして三池へ」再読のお願い

先の百年祭の折に、記念誌として発行された大牟田・荒尾地区与論会刊行「口之津移住百年祭記念誌・与論島から口之津へそして三池へ」を愛読していただいておりますか、中には何回も読み返したという話も聞きましたが、編集者としては記念誌の中で、黄色にて綴じてある159頁からの「三池移住50年の歩み」奥洲奥都城会・昭和41年8月発行「編集責任者若松沢清氏」の処をみんなで読んでいただくことで、与論島の先祖を持つ皆様の「誠の心」を受け継いでいただきたいとの思いで記念誌に載せております。改めて与論会だよりに数頁ずつ掲載しますので子供やお孫さん達にもぜひ読ませてください。

はじめに

編集部代表 若松沢清著

与論島を故郷とするわたくしたちの先輩が、明治31年の台風による大飢饉を契機に、黒潮とどろく、太平洋上の孤島を後にして、第二の故郷建設の熱意に燃えて、長崎県の口之津に集団移住を決行してから60有余年になる。其の後、明治42年、三池港の開発に伴い、福岡県の大牟田に移り、三池港の港湾労働者として、三井鉱山の生産機構の中に組みこまれてから50有余年になる。

わたくし達の先輩の歩みは、一口に云って、人種的偏見と差別に対する苦闘の歴史であったと云える。今日、わたくしたちが与論人と呼ばれることに、何らかの抵抗感なしには受け取れないと

いう心情も、このような歴史的なものに深く結びついているからである。与論人であることを、ひた隠しに隠して生きねばならなかった、かつての苦悩が、今なお心の奥に傷痕として刻み込まれているということであろう。しかし伝統というものは、軽く見通すことはできない。それはわたくしたちの血の中に重く沈んでいる。

わたくしたちの血の中には、祖先の果さんとして果し得なかった無限の恨みが息づいているはずだ。わたくしたちの夢をうながし、活力を湧出せしめているものが、血の中に脈うっている。それが伝統というものである。

与論島

ふるさと「ユンヌ」を讀えた民謡としてつぎの歌がある。

ユンヌ ちゆる島や いにくさやあしが
なべそこのなかに 五穀のたまる

与論島という島は、なべのような形をした小さな島ではあるが、なべの底には五穀が、豊かに実っている平和な楽土である。という意味だが、豊かな実りは単に五穀だけでなく、一島一村、人情厚く、礼儀正しく、相互扶助の団欒に、誠の花が咲いている見事な共同体の実りも意味している。

古老の語る与論島(現在の姿ではない)の素描からはじめよう。地理的には沖縄に近く海上八里、沖永良部島まで十三里の位置にある。

周囲わずか五里、全島がサンゴ礁からなる低い丘陵性(最高地点で海拔九四米)で、河川はない。

洋上はるかに眺むれば、波浪のひとうねりにも似た孤島が一島一村の与論島である。

サンゴ礁が風化して出来た粘度質土壤のため、かわくと石のよりに硬くなり、雨が降ると、ねばって耕作に苦労する。

さつまいは一年中とれ、主食となつてゐる。必要なときに、さぐり掘りと云つて必要なだけとつてくる。

雨さえあればいつでも苗を植える。さとうきびは島の大切な換金作物で、多くつくられてゐる。田は河川がないので天水田である。

島民は半農半漁を生業とし、副業として牛、豚等の家畜を飼い、女は大島紬で稼いでゐる。

夏の気温は高いが、ときどきスコールがあるのでしのぎ易い。

台風対策として、家の周囲は石をつみあげて、石垣でかこい、ガジュマルを防風林にしている。

海岸線は単調で短かく、遠浅のため、大型船舶の寄港は困難で、唯一の港である茶花港でさえも、海岸から三百米程の沖合に仮泊する。

緑したたる榕樹の影に隠れる家屋のたたずまい、白砂に照りつける南国の明るい太陽、海岸や道路沿いをいろいろとっているソテツ。

情緒豊かな平和な楽土も、ひとたび荒天になると、島をとりまく

サンゴ礁に碎ける波濤のとどろきが島中を振動し、打ち寄せる波は、小山のような凄いうねりである。他島との交易は久しく絶たれ、孤島苦の生活がはじまる。

昔も今も、島にとって一番怖いのは台風という名の定期便であり、早ばつである。

島民の汗の結晶である農作物を、情け容赦なく吹きちぎり、時には家屋まで吹き倒す。

台風で農作物が全滅してしまうと、ソテツが生命の糧となる。

その茎からは余り良質ではないが澱粉をとることが出来る。ただし処理を誤ると、猛毒で死に至ることもある。「ソテツ地獄」と云う言葉は、飢饉や、貧困のための食糧難を意味する言葉として使用されてきた。また、ソテツの実では味噌などもつくる。

島には河川がないので日照りが続いたら大変なことになる。島民は台風の次には、早ばつに痛みつけられた。一面の田畑が赤枯れし、地割れする。島では久しく雨が降らなくなると、金物を持ち、神どころと云われる場所で打鳴し祈願する風習がある。

雨たばりたばりー いみたばりたばり
島が富ど 世が富

此の雨たばりの祈願は単に早ばつの時の雨乞いに唱えられるだけでなく、毎年旧の八月十五日の奉納踊りの冒頭に唄い踊られる。次に島民を苦しめたのは、悪疫の流行であった。明治十一年にはチブス病、コレラ病と思われる熱病の流行で、多数の死者をだし、明治十九年には痘瘡の大流行で千数百名の死者を出すと云う大惨事に見舞れた。患者は島民の半数に達し一家全滅したところ

もあつたと云う。死者の棺がつくれず、ムシロや空俵に入れて、岩陰に風葬したところもある。と古老は当時の惨状を語っている。

深々と孤島の夜が更けわたり、ランプの灯影も消え、荘厳なる天体の蒼白い光に濡れて島が眠りに入るとき、ケツケツと金属的な声があちこちから聞こえる。此の声の主はやはりだ。天井をわが物顔で這いまわっている。

遠く蛇皮線に合わせて、若者達の唄う民謡の調べが、静寂の底から、潮騒に乗って流れてくる。

☆

沖縄がそうであつたように与論島も、時代の上限は明かではないが、島に住みついた人々が、農耕生活にはいるようになって、農耕地を中心に、それぞれ部落をつくり、定住生活をはじめたものであろう。

与論島略史年表によれば(野村政尚著)、一二六六年に与論島は琉球王国の所屬となり一五二五年に、又吉按司が、与論島主として来島されている。

沖縄は部落時代より、日本本土、及び中国との交易により、新しい文化を吸収しつつ、総合的な土着の文化を創りあげていったが、与論島も按司の来島に伴い、沖縄との交易も増え、若干沖縄文化の影響をうけたものと思われる。

しかしながら、もともと自然条件に恵まれない貧困の孤島は、さほどに他島の関心を惹くこともなく、従って外来の刺激は、少なかつたのではないかと思われる。

それでは与論島においては、他島に比し、古代文化の名残りが多分に温存されていたのではないか。奄美大島、沖縄の人達が、与論語はわかりにくいと云っているのも、僅か周囲五里の島だが部落によって言語のアクセントの異なるところも、古代血縁集団の名残りとも云えるのではないだろうか。

ところで沖縄に見られるように、与論島においても、農耕に大きな影響を与える自然現象に、大きな霊力をみとめてこれを神とし、部落生活における災をとり除き、福を招くようそれらの神々に祈る風習がある。

古い井戸や、古い住宅跡、特異な印象を与える老樹や岩石など、それぞれ神の鎮座するところと考え、これを「拝み所」と呼んだ。稲、麦などの主要作物についてはとくに神々の庇護を求め、その種まき、生長、とり入れに際しては儀礼的祭りを行った。

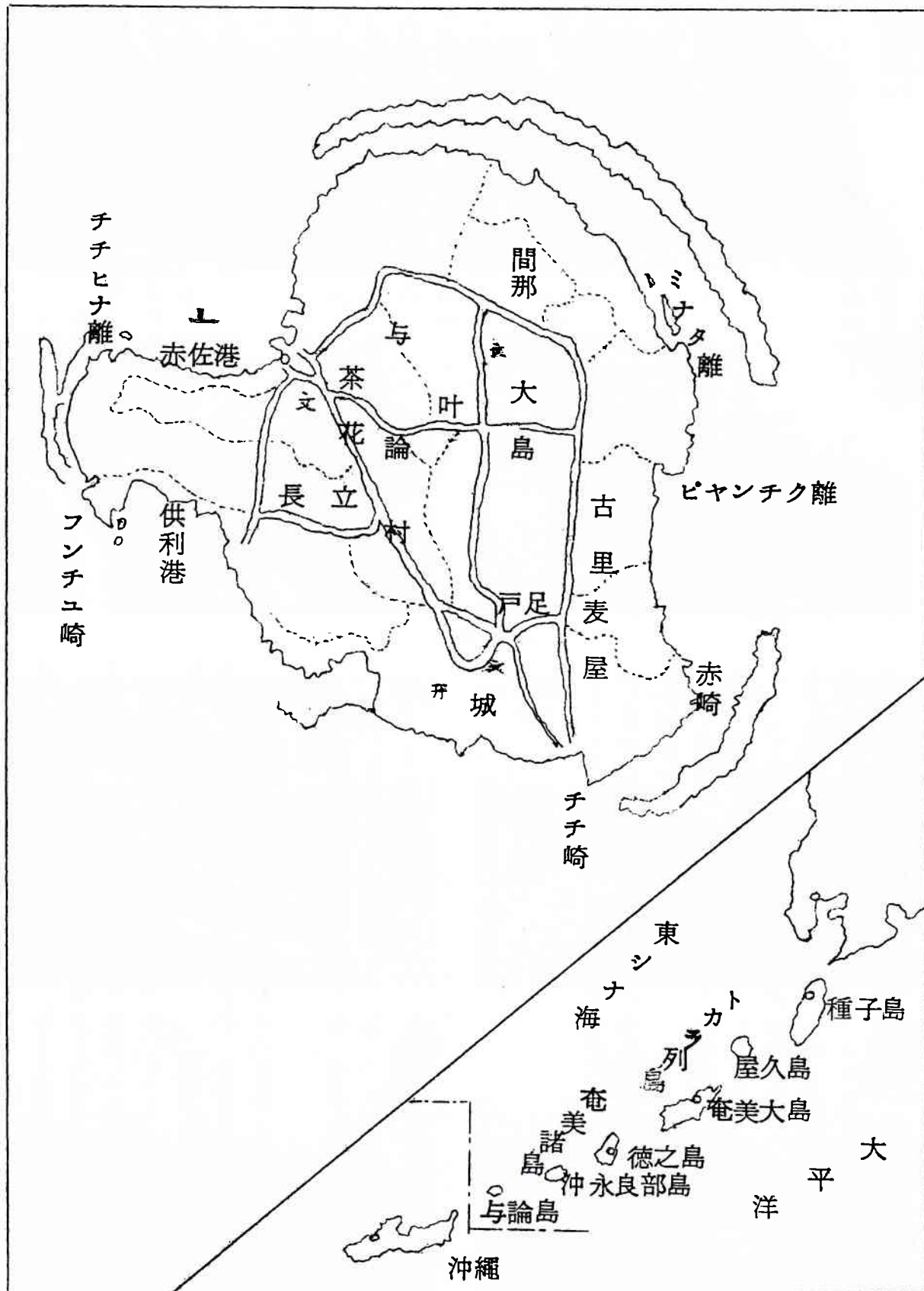
自然崇拜と、祖先崇拜とは、原始信仰として生活の中心思想であつた。

島民にとって、島はそのまま局地的小宇宙であつた。

島民はこの小宇宙に生まれ、そこで成長し、その中から妻を迎え、身内の者にとりまかれる中で、激しい個人的利害の対立を経験させられることなく、生き、働き、そして死んでいった。其処には自足と安逸と牧歌的な平安とが支配していた。

一六〇九年琉球は、薩藩の所屬となり、封建社会への傾斜をたどるわけであるが、薩摩藩の豊かな財政を支えるために、さとうきびの栽培に島民は牛馬の如く酷使されることになる。その残酷物語りを「与論島史」(野村政尚著)から拾ってみよう。

与論島の略地図



徳川幕府は、幕府の安泰をはかる政策の一環として、諸国の大名を財政的に追い込み、謀反を企てないよう画策した。江戸に用地を払い上げて屋敷を造らせたり、参勤交代の制度を設けたりした。九州の南端から江戸までの費用は莫大なものである。薩藩は財政的に苦しくなると、島民を徹底的にしほりあげた。男子は十五才から六十才まで、女子は十三才より五十才まで、作業夫としてそれぞれ耕地を割当てられ、耕して畑とされる処は、稲を作らせないで、さとうきびを作らせた。

各間切りには監督の役人を配し、積苗から収獲に至るまで厳重に監視せしめ、成熟期には立毛について検視を行い、製糖の際には、煮汁検査を行った産糖が予想高に達しない場合には、隠匿を糺し、拷問に付して頗る峻厳を極めた。

夏、秋の頃には毎夕、海岸から白砂をきび畑に運ばせ、島民は専らさとうきびの、栽培に従事せしめられ、安息する暇がなかった。

若しきびの切株が高ければ札をはかせ、砂糖を指先につけてなめただけでも、直ちに鞭の刑を加えられ、製造の粗悪なる場合には、カブリ(首枷)シマセ(足枷)の刑に処し、密売するものは死刑に処せられ、付和雷同するものは遠島に処せられた。

薩藩は砂糖を阪神地方に高く売りつけ、生活必需物資は、大阪で安く仕入れ、島で高く換え渡すという二重搾取を行っていたのである。

古老の訓える「上には水は流されぬ」とか「指は内にしか折れぬ」という諺などは、築城にかりだされた苦役や、さとうきびの栽培に酷使された苦悩の中から生まれた思想であらう。

圧制に痛みつけられた島民は、被征服者としての悶々の情を訴えるところなく、わずかに民謡に托して余憤を洩らしたのである。全精神を民謡に打ちこんで、暇さえあれば愛蔵の蛇皮線に合せて歌い、自らの悲痛を美化し、芸術化して慰めたのである。明るい南国の太陽の下に、なぐり、なぐりの哀調を基調とした民謡が生ま

れたのは、このような歴史的背景の一面があるからである。

民謡こそは書かれざる島民の忍苦の歴史であり、生活の記録である。

自然の暴威と、歴史の圧制による、極負と悪疫にさいなまれながらも、島民はそれらに屈することなく、大地に根をはって、どっしりと生き続けてきた。

この逞しいエネルギーは、民謡を通して掘り起すべきだろう。



島民精神の伝統を理解するうえにおいて、重要と思われるので、少しながいが、岡本太郎の「忘れられた日本」より(美さ瘡)の一章を引用しようと思う。

……沖縄には(美さ瘡)という面白い言葉がある。天然痘のことだ。近頃は病氣自体がなくなっただけであまり使わないようだが、どうして痘が美しいのだろう。折口信夫はこれについて「病といえども(他界からくる神だから)一応は讃め迎え、快よく送り出す習しになっているのである。……海の彼岸より遠来するものは必ず善美なるものとして受け容れるのが、大なり小なりわれわれに持ち伝えた信じ方であった。」と報告している。

適切な見方である。しかしそういう過ぎ去って行く神秘的なものに対する儀礼的な気分だけでは、この微妙な表現は解明しつくせない。もっと現実的なおそれをこめた弁証法的な表現がそこにあると私は考えるのだ。

外からくるものは、いつも力としてやってきて、このチノトニーの世界に爪跡を残す。それは善し悪しを抜きにして「貴重」なのである。

だから畏れ敬って一応無条件に迎える。だがなんといつてもこれは天然痘なのだ。

決して好ましい客ではない。この凶悪に対し彼等は無防備なのである。

卑しめたり粗末に扱えば、たたりがひどいだろう。なだめすかしてなるべくおとなしく引き取ってもらわなければならない。

恐ろしいから大事にする。人間が自然の気まぐれに対して無力であった時代。災禍をもたらす力は神聖視された。凶なる神聖である。それは幸なる神聖と表裏である。

幸と不幸とがどこで断絶し連続しているか、それが誰にわかるというのだろうか。

近代市民のように功利的に吉と凶、善と悪まるで白と黒のように、きつちり色分けして判断し処理することは出来ない。

幸いはそのまま災いに転じ、災は不断に幸いに隣りあわされている。それは常に転換し得る。強烈に反発し対決してうち勝つなんていう危険な方法よりも、

うやまい奉り巧みに価値転換して敬遠していく無防備者の知恵であった。……

沖縄より文明度の低い与論島のことだから「美さ瘡」という言葉で表現されている伝統は、無防備者の知恵として根深いものであったろう。

筆者は少年の頃、病氣にかかって寝ている枕許で、母が重々しい声で唱えていた「読み言」の中に、それを感じていたことが、記憶に残っている。

さて、与論島民精神の神髓を唄ったものとして広く愛唱されている民謡として次の歌がある。

打ちぢやしよりぢやしより

誠打うちぢやしより

誠打ちぢやしば 何 恥じかしやんが

(訳) 打ち出しなさい。誠を打ちだしなさい。誠さえ打ち出せば、何の恥ずかしいことがあるものか。ない。

与論民謡の底を一貫して流れているもの、それはこの「まこと」である。

自然と歴史の二重苦に堪え抜いた、ながい苦闘の生活の積み重ねから生み出されたものであり、自己に対し、隣人に対し、自然に対し祖先に対し一貫して持ち続けたものである。それは行動の原理であり、救いでもあり生の充実でもあった。

貧困の孤島では、個々ばらばら、弱肉強食では、自滅してしまふのだ。

あらゆる生活の場で、打ちだされる「まこと」を中心にして、島民が心を寄せ合い、扶け合い励ましあったからこそ、困苦に堪え抜くことが出来たのである。

「まこと」から生みだされた逞しいエネルギーが、冒頭に掲げた美しい故郷讃歌をうみだしたものであると私は信ずる。

そのことは、次にかかげる民謡が、如実に語っている。

世間しけんや水車 代わすなよ 互たけえに
廻めぐて来る えまや しちゆど待ちゆる

(意訳) 世界とは水車のようなものだ。心変りのないようお互い
にがつちり結んで、めぐってくる幸せを、働きながら待ちま
しょう。

有為転変極まりない浮世に生きる人間の態度を訓えたものであ
る。

島の諺に「千貫せんし買かうらぬ 片な 言葉かたば」というのがあるが、誠
から打ち出された言葉の貴さを訓えたものである。

さきに紹介した、無防備者の生活の知恵うやまい奉り巧みに価
値転換していく場に、積極的に「まこと」を打出すことによって
乗り越えようと構えたところに、先祖の深い叡知を思い感動を
覚えるのである。

だが、伝統は発展せしめないことには亡びる。伝統を愛するこ
とは、これを掘り起して、正しく発展させることである。

次回へつづく



令和3年 大牟田・荒尾地区与論会予定表

令和3年1月1日～令和3年12月31日

月	日	曜	行 事	要 項
1月	3日	日	奥都城初詣	開館時間 午前10時～12時
3月	28日	日	奥都城清掃	3・5地区担当 午前8時開始
4月	4日	日	奥都城春季大祭	祭典開始 午前10時
5月	9日	日	奥都城清掃	6・15・16地区担当 午前8時開始
	未定		与論中学校修学旅行	交流会（奥都城前広場）
6月	13日	日	奥都城清掃	4・10・11地区担当 午前8時開始
7月	未定		第45回与論会定期総会	与洲会館 午後1時30分開始
	11日	日	奥都城清掃	13・14地区担当 午前8時開始
8月	8日	日	奥都城清掃	17・18・19地区担当 午前8時開始
	13日	金	奥都城お盆	開館時間 午前10時～12時
9月	12日	日	奥都城清掃	1・2地区担当 午前8時開始
	19日	日	奥都城秋季大祭	祭典開始 午前10時
10月	10日	日	奥都城清掃	12・20地区担当 午前8時開始
11月	14日	日	奥都城清掃	7・8・9地区担当 午前8時開始

奥都城清掃当番の日時は忘れずに印を付けて下さい。

手袋は用意してます、使用後はお持ち帰りください。

お茶菓子を用意しておりますので最後までのご協力をお願いします。

広告募集



ここに広告を出しませんか

大きさは1/2ページ
金額は毎回3,000円
年3回発行(正月・春・秋)
内容は公序良俗の範囲
原稿は貴社提供のみ
会員を優先します
広告以外でも活用してください
内容について当会は関知しない
原稿と金額を添えて申し込みをして下さい